

Title	色のある星
Author(s)	佐登兒
Citation	天界 = The heavens (1942), 22(252): 188-188
Issue Date	1942-05-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/168385">http://hdl.handle.net/2433/168385</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

側では環は細く、赤道面より捩れて約黄道面内に來り、長い尾を曳くといふ。この發光は、螢光か或は殘光であらう。春分時には、夜の光錐は、黄道の南に、朝の光錐はその北にあり、秋分時には、位置はこの反對である。

さて黄道光の夜の部分と朝の部分とは、相連なる。即ち圓錐の一つの頂點から他の頂點にまで、天空を渡つた、細い帯があるのである。これは約黄道面内にある。太陽より $30^\circ$ の距離が最近接可視部であるが、帯は $40^\circ$ 位の幅がある。太陽の軸に沿ふては $70^\circ$ 位あらうといはれる。太陽から $90^\circ$ の所では $20^\circ$ 位の幅、 $150^\circ$ では $10^\circ$ 位の幅になり、 $180^\circ$ では、帯が一寸薄い光の節となつて膨れ、對日照となすのである。ロシアで7月末、スイスで春分頃に寫した、黄道光の見事な寫眞も載せてゐる。小生は、遊星學說信奉者である。

中央氣象臺發行の航空氣象報告には、都市の暈光の寫生が出てゐるが、黄道光や夜天光の研究は防空の見地からも重要である。

## 色のある星

多くの星は明瞭な色彩を現はして居る。單獨の橙色や赤色の星は極めて普通であるが、青や緑の星は大層稀らしい。然し、二重星の場合には色の違ひがずつと目立つ。黄(又は橙色)と青が一緒になつたのが屢々である。又、多くの場合には、緑がかつた色彩は、主星が黄色か橙色の場合に、青の代りをする。それで、多くの星は補色を現はす。斯様な場合には、假りに分星(components)の大きが大變に不釣り合ひだとすれば、色が補色のものであるといふ事實は、唯單なる對照の影響であるらしく思はれる。然し、多くの場合に、實際は一定の色の光を放射する恒星や、二重星其の他の星がある事は疑ふべくもない。個々の遊星が、太陽の様に見做される之等の星の周りを廻轉して居ると考へて、彼様な遊星に分與された光は、極めて目立つた美しい影響を受ける。此の事は例へば、ガスの噴出、又は、蠟燭が、凡て深紅色か、他の色彩球内に隠されて居る應接室に於いて、時折見られるのと類似して居る。

形が大きくて、一定した色を現はす單獨星には、次の様な例がある：——

**白色星**——大犬座ア星、獅子座ア星、獅子座ベ星、南魚座ア星、小熊座ア星

**赤色星**——牛座ア星、蝸座ア星、オリオン座ア星

**青色星**——駁者座ア星、オリオン座ベ星、オリオン座ガ星、小犬座ア星、乙女座ア星

**綠色星**——琴座ア星、鶯座ア星、白鳥座ア星

**黄色星**——牧夫座ア星

(“Pictorial Astronomy”より、佐登兒譯)